

豊明希望チャペル礼拝

2026/10/18

「いたるところで福音を宣べ伝え」

ルカの福音書 9：1～9

今日の箇所は、イエス様に選ばれた使徒と呼ばれる 12 人の弟子が、はじめて、



伝道に遣わされた場面です。この絵は、レオナルドダビンチの最後の晩餐の有名な絵ですが、左端のバルトロマイから始まって、イエス様の左横には、ヨハネと、ペテロ、あのユダを含む右端のシモンまでが、描かれています。

今日の箇所のところまでは、ただ、イエス様についていくだけでしたが、ここからは、ある意味、一人前のイエス様と同じような、宣教の業に遣わされる事になった、その場面であります。6 節までのところを、今一度、一気に読んで、確認しましょう。

「9:1 イエスは十二人を呼び集めて、すべての悪霊を制して病気を癒やす力と権威を、彼らにお授けになった。9:2 そして、神の国を宣べ伝え、病人を治すために、こう言って彼らを遣わされた。9:3 「旅には何も持って行かないようにしなさい。杖も袋もパンも金もです。また下着も、それぞれ二枚持つてはいけません。9:4 どの家に入っても、そこにとどまり、そこから出かけなさい。9:5 人々があなたがたを受け入れないなら、その町を出て行くときに、彼らに対する証言として、足のちりを払い落としなさい。」9:6 十二人は出て行って、村から村へと巡りながら、いたるところで福音を宣べ伝え、癒やしを行った。」

教えられるべきポイントはいくつもあるかと思います。おそらく他にたくさ

んいただろう弟子達の中から、特に 12 人を選んだこと。彼らのほとんどが、学者でも、ある意味でのエリートでもなく漁師であったこと。その中に、裏切り者のユダがいたこと。彼も呼ばれたこと。

<役割>彼らの役割は、**1, 聖霊を制する(追い出す)、2, 病気を癒す(治す)こと、3, 神の国を宣べ伝えること**です。

彼らが持参したもの、あるいは持参しなかったものについては、基本、何も持たないで行くべき事で、特に、持っていないものとして具体的にイエス様によって言及されているものは、以下の通りです。

<必要：不要な物>

1, 杖、2, 袋、3, 金(お金)、4, 下着(1枚のみOK)です。4の下着のみということについては、マタイ 5:40 の山上の垂訓で、イエス様が、下着を取ろうとする者には、上着をも与えなさいとありますので、上着も当時、あったでしょうから、なぜか上着のみと言う事になりますが、下着を二枚も持つなということは、当然、上着も持つなと言う意味なのかも知れません。要するに必要最小限ということでしょう。

<注意点>

旅では、迎えられた家に留まり、そこから遣わされるべき事。受け入れられない町では、足のちりを払い落として、次に向かうべき事。

以上です。

一つ一つ、なぜ、そう言われるのか、その意味と、目的を読みとってみたいのは山々ですが、実際、私も読み取ろうとしたのですが、その結果からお伝えしようと思います。

かなり、適応が難しそうだということです。私は、7年ほど、神学校で、これから、牧師になって遣わされていく方々に、牧会学という授業をさせていただいたことがあります。ですから、ここから、牧師、伝道師、宣教師となって出ていく場合の、心構えなり、そして、必要不必要なものを、探ろうとしました。また、出来れば、そこから、私たち、救いをいただいて神の国の民となった、クリスチャン一般の私たちにも、学ぶべき点はないかということです。たくさん教えられるべき事があります。特にその覚悟、あるいは、心構えという点ではそうです。ここで教えられていることの第一は、**大部分は神に頼れということ**

とです。下着一枚まで頼れとは言わないが、最小限の必要、それ以外は、神に期待せよということ。

日本にも、「裸一貫」という言葉があります。元手となるお金・財産・人脈などが無い状態で出発することを意味します。「ふんどし一ちょう」で出かけるなどという言い方もありますが、裸一貫のこの一貫は、お金の単位で、一文銭 1000 枚を意味します。一文が 10 円から 30 円に換算されると言いますから、10000 円く



らいです。日常生活の財布にあるだけのお金で、旅に出るというイメージで、今日の御言葉に近いイメージかも知れません。



神学校の牧会学で詳細に適應してみようと考えたときに、そもそも、大学卒業を資格に受け入れた生徒に、さらにこの神学校で5年も学ぶようにと言った途端、お金のことではないですが、備えが多すぎると思ってしまいました(←神学舎教室)。いたい、何をイエス様は教えようとされているのか・・・考えた末に、ひとつのことに思い至ったことを思います。

それは、使徒達が宣教の旅に出ても、多くのものを必要としなかったのは、多くの助けが用意されているからだということです。イエス様の言われた事を、少し冷静に分析すると、自分であらかじめ用意する必要はないと言っておられるのであって、たとえば、先ほど触れた、イエス様の、「どの家に入っても」という一言は、家に迎え入れられると言うことが前提だという事です。

であれば、その家で、これから冬に向かいますから、そんな薄着ではどうしようもないでしょう、どうぞ、この上着を着て行って下さい。何日、その下着をつけておられるのですか？今晚中に洗濯をしておきますからね。途中で、このパンを食べて行ってください。あ、この魚も、そうしたことがあったはずだと言うことです。その箇所をあらためて引用しましょう。

「9:4 どの家に入っても、そこにとどまり、そこから出かけなさい。」

必要なものは神が用意して下さる。そうなのですが、実際には、このように、たくさんの人の好意にあずかることが、容易に想像出来るということです。そういう意味では、私なら、イエス様、私は財布に出来るだけの財産を入れていきたいのですがと言うかも知れません・・・主よ、お金が欲しいとか、不安だからお金を持っていこうと意味ではないのですが、人に迷惑をかけたくないのです。何かいただけると言われても、いいえ、手持ちがあります。私はただで福音をお伝えしますと言いたいのです。下着の洗濯、いいえ、夜、私が自分で洗います。あなたに面倒をおかけしたくありません。それが私の宣教です。そういうのはダメでしょうか？と。私はイエス様に聞くとします。「イエス様は、人に迷惑をかけるとするな、神があなたに下さったことと受け入れなさい、手持ちがありません、あなたに助けていただかなければ、たしかに飢えてしまいますと告白して、助けていただきなさい、そう言われるのでしょうか？」と。

私は、この命令は、この派遣は、そうだと言っているように思えたと言うことです。杖がなければ人に支えてもらわねばならない。袋がなければ、生活に必要なものを持ち運べません。次々に助けを求めなければならないのです。歯ブラシもあります。歯磨き粉もあります。タオルもあります。着替えも持ってきませんでした。寝るところありませんし、寝まきも持ってきませんでした。私は、何回、「ありがとう」と言わねばならないでしょうか。何度、シャローム。祝福があるようにと声をかけなければならないでしょうか。福音を語り、ありがとうと言われます。癒しをなし、貴方のおかげですと感謝されるかも知れません。しかし、それと同じくらい、ありがとう、貴方のおかげで今日もゆっくり寝られますと、私も感謝しなければならないのです。そして、夜には、神よ、親切な人、信仰の人を備えて下さった事を感謝しますと涙を流すのだろうということです。私は、この箇所を、繰り返し黙想しているうちに、何かが見えてきたように感じたのです。

それは、結局、一周回って、結局教えられることは、神が用意して下さるから、御言葉だけ携えて、出て行きなさいと言うことです。そして、見方を変えると、「支えられることを喜ぶ」謙遜さです。

淀川キリスト教病院の柏木医師が、歳をとって学ばなければならないことがあると言いました。それは、助けられることを受け入れる心だと。人は老人になるにつれて、自分で出来る事が少なくなる。その分、人からの助けが必要になる。その助けを喜んで受け入れる事が出来ない老人は不幸だと。

ボランティアの現場で、助けられることを嫌がる人もいる、それがボランティアの人つん課題だと言います。忍耐こそ美德であって、我慢できないことは恥だと教えられていて、いつのまにか、自分で自分や家庭を守れないのは「失格」と思い込んで、真面目で努力家の人ほど、自分で自分を追いつめてしまう、それは特に日本人の特徴で、自分が一方的に「助けを求めている」とだけ考えて、「申し訳ない……」と遠慮してしまう、人に迷惑をかけたくないと思って支援を受け入れてくれないというのです。

実際、私がこの教会に赴任して来た時、教師姉妹に、布団も用意してなくて・・・何なら、パジャマもなくて、あと、明日の買い物のお金も持ってません。もちろん、車もありませんし、何にもないのですが・・・と、言いましたら、受け入れて下さるでしょうか。きっと、愛のある豊明希望チャペルのみなさんは、張り切って、一切を用意して下さると知っています。私は大感謝、あなたがたがいなければ、生きられないし、福音を語ることも出来ません、必死に祈ります。病気の癒やしの祈りなんか命がけです。神さま、彼らは私の命の恩人です！癒してもらわないと困ります！と徹夜で祈るでしょう。ある意味で、この関係のこと、すなわち、教会とは何かということを、共に教えられると言うことであり、共に神の恵みを経験すると言うことであり、そして、だからこそ、ここで彼ら使徒達が、このような形で遣わされると言うことは、私たちクリスチャンが、あるいは、豊明希望チャペルが、互いに兄弟姉妹を必要とし、互いの癒やしを祈り、必要を祈り、その結果を共に喜んでいくことが出来る、その派遣、その遣わしだと言うことを教えられるということ

す。

イエス様が、下着も二枚持たず、あるいは、杖も袋もというときに、それは物というばかりではなくて、彼ら弟子達は、学歴なり、御言葉を伝える経験も、たとえば当時の学者らに比べれば雲泥の差、天と地の差がありました。人に助けていただける、尊敬を受けるだけのものをほとんど持ちませんでした。それでも、主が支えてくださる、大丈夫だと遣わされたと言うことです。

旧約聖書の**モーセ**が、神さまに召されたとき、彼は、「私は、一体何者でしょう」「到底私には耐えられない」他の人を遣わしてくださいと言いました。

エレミヤが、神に召されたとき、「ああ、神、主よ。ご覧のとおり、私はまだ若くて、どう語っていいかわかりません。」と言いました。

そんなモーセ、またエレミヤが果たした役割は、神さまが用意して下さっていました。モーセは何万の民を導き、エレミヤは王を正します。

7節以下で、時の領主ヘロデが彼ら、ただの漁師達を、私が殺した預言者ヨハネかもしれない、あるいは、旧約の預言者エリヤかもしれないと恐れました。ある意味、それほどに、神は、彼らの権威、彼らが尊敬に値する人として引き上げて下さったとも言えます(9:7～9)。

今日は、神に遣わされると言うことの意味を、主の使徒達、限定という枠を超えて、私たちも、神に救われ、クリスチャンとされ、証人として、この世に遣わされている存在、地の塩世の光として遣わされている存在である事を思いながら、何を持たなくても、何の能力も持たなくても、必ず、主の召しに応えようと教えられたのだと思います。また、私たちが、見かえりを求めずに支え合うこと、互いに「ありがとう」と言い合う関係を喜びたい、そのために、互いの援助を受け入れる謙遜さを持ちたいとも教えられました。証しの使命は、けっして一人だけで果たせるのではなく、支え合い、祈り合って支えられてこそ、果たせるのだと知って、共に集(つど)う事をやめないで、共に出ていく、共に使命を果たし合う存在として、ここから、証しの歩みに出ていきたい、遣わされていきたいと願うのです。

祈りましょう。